

エルサルバドル便り -昼食配給サービス-

親愛なる日本の友人へ

お元気ですか。いつも世界中の友だちの協力に感謝しています。

今日は「みつばち保育所」の昼食サービスの報告です。保育所に通ってくる子どもたちが、家族のような暖かい雰囲気の中で美味しい食事ができるように、私たちは毎日困難な状況の中で奮闘しています。昼食は「お腹がいっぱいになればいい」「なんでも食べさせたらいい」という考えではなく、貧しい家庭生活の栄養面を少しでも補えるような食事を準備し、楽しい時間を子どもたちと共有したいという想いから始まりました。

保育所では、現地の栄養指導員の先生が協力しながら、料理、テーブルセッティングなどエルサルバドル人の学生が中心となり朝早くから準備をします。準備を終えると子どもたちを家まで迎えに行き、子どもたちの家庭での様子、家庭状況、保護者の希望などを聞き、コミュニケーションを図ります。それによってどの様な援助が必要であるかがわかるからです。



楽しい昼食の時間

保育所に着いた子どもたちは、幼児と小学生の2つのグループに分かれ食事をします。同じような年齢の友だちと過ごす時間は、友だちへの思いやりや注意を育て、少しずつよい距離感で人間らしい関係を築きます。この昼食サービスが始まった当初は、テーブルについてゆっくり食事をとることやフォークやナイフを使うこともままならなかった子どもたちでしたが、回数を重ねるうちに落ち着いて食卓を囲み、友だちと楽しい会話をしながら食事をするできるようになってきました。この昼食は子どもたちが栄養面でカバーされるだけではなく、社会生活への一步を少しずつ歩み始めてくれることを願っています。その姿を見つめながら、この事業の大切さと責任の大きさを感じています。

このサービスは、日本、イタリアから送られる支援金とエルサルバドルの企業と友人の協力によって実現しています。皆さんからの支援金はスタッフにとって大きな励みです。「また明日、子どもたちの明るい顔を見られる」と思えるからです。

これからも安定した昼食配給サービスが継続できるように、日本の友だちの協力をお願いします。そして私たちが休むことなく働けるように、どうぞ祈ってください。

2009 年 3 月 12 日



栄養バランスを考えながら調理するスタッフたち

“Israeli-Palestinian Conflict”

私たちはあの子どもたちの涙に関係ないのでしょうか。

2009年1月17日、私たちオリーブジャパンは名古屋栄で行われた、「キャンドルピースアクション」に参加しました。イスラエルがガザ地区への無差別攻撃を繰り返す中、私たちはこの日、ろうそくの灯をともし、イスラエルへの攻撃中止を求める声を挙げ続けました。

2008年12月27日にイスラエルはガザ地区へ進行し、三週間に及ぶ大規模攻撃によって、パレスチナ人の死者は1300人を超えました（2009年1月13日付）。中でも女性と子どもの死者数は多く、全体の70%に及ぶとも言われています。しかしマスコミや紙面で伝えられていない犠牲者の数は数えきれないに違いありません。このガザ地区への無差別攻撃の停止を願い、「この子どもたちの涙は、私たちに関係ないのでしょうか」というメッセージを、私は街頭で仲間と一緒に呼びかけました。

私がこのようなデモに参加しようと思ったきっかけは、イタリアで毎年夏に開催される国際平和フォーラム「トナーレエスターテ」で、ミシェル・ワルシャウスキー氏に出会ったことです。彼はイスラエル人ですが、自らの命をかけて、パレスチナ



人を助ける活動をしている方です。平和のために自らの人生をかけて叫び続け、行動している彼の話を聞き、私は本当に衝撃を受けました。



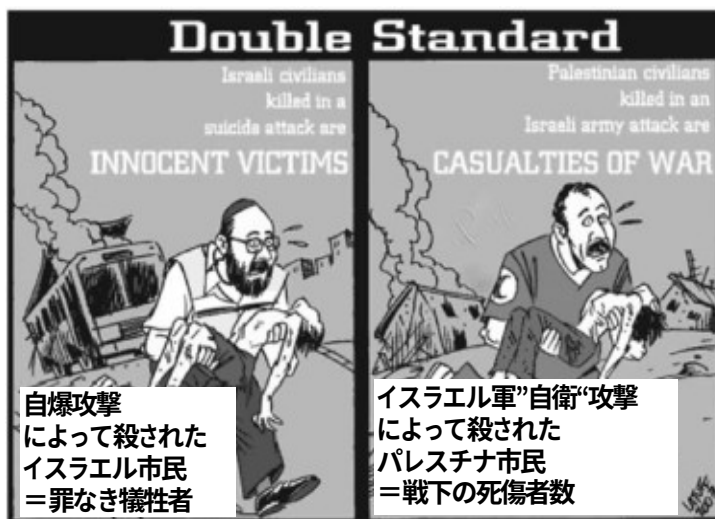
ガザの出来事が「海外で起きている一つの不幸」と、簡単に片付けていた無関心な態度を、私は彼との出会いによって、取り続けることができなくなったのです。

今、世界ではオバマ大統領が、パレスチナ側にも耳を傾ける公正な態度を取れるかどうか、またイスラエルに自制を迫ることができるのか注目されています。その中で、私たちがここ日本で出来ることは何でしょうか。それは、まずメディアやマスコミの情報をうのみにしないことや、世界中の出来事（紛争・飢餓・人権侵害・差別等）に対して関心を持ち続けることだと思います。

一日も早くイスラエルがガザ境界の封鎖を解除し、この日の映像にもあったように、病気で苦しんでいる人々や、攻撃の被害者に治療の機会が与えられることを願います。

記事：山田陽子

＊デモで掲げたポスター＊



出典：PANE PACE LAVORO, numero 10-11, ott-nov 2003, p. 3

ガザ地区について



地中海に面したパレスチナ自治区のひとつ。1967年の第三次中東戦争でヨルダン川西岸とともにイスラエルに占領され、パレスチナ暫定自治に関する93年のオスロ合意で自治区となる。

この地区に住む住民の3分の2が、年の第一次中東戦争によって発生したパレスチナ難民及びそ

の子孫。政権はハマスによる独自行政が行われている。（ガザ地区はハマスの政権、西岸はアッバス体制が掌握）今日までイスラエルはガザ封鎖を続け、今回の大規模攻撃に至る。ガザ境界の封鎖は未だに解除されておらず、住民は原則として自由に外に出ることができない。

◆ガザ地区侵攻概要◆

■2008年12月18日、パレスチナ自治区を実効支配するハマスが、ガザ地区でのイスラエルとの6カ月間の停戦が終了したと宣言。自治区ガザにてイスラエルとパレスチナ武装勢力の衝突が激化するさなか、同月27日、イスラエル軍による空爆が開始。少なくとも200人が死亡、200人以上が負傷した。EU議長国フランスは双方に即時停戦を呼びかけたが不発に終わり2009年1月3日、イスラエル軍による地上侵攻が開始。イスラエル軍は7日より毎日3時間、ガザ地区への援助物資搬入のため攻撃を一時中断すると発表した翌日、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）への攻撃により死者を出しUNRWAは活動を休止。世界食糧計画（WFP）は9日、約150万人のガザ住民の8割が飢餓に直面していると指摘。7日、国連安全保障理事会は「即時かつ恒久的な停戦」を求める決議案を賛成14、アメリカの棄権1で採択。現在エジプトの仲介による停戦交渉がカイロで始まる中、双方とも攻撃をエスカレートさせている。



2009年3月8日（日）フォトジャーナリストであり DAYS JAPAN 編集長の広河隆一氏による講演会が行われました。

戦場で何があったか。イラク・アフガニスタン 広河 隆一氏による講演会に参加

「たった一枚の写真が世界を変えることがある」。「人々の意志が戦争を止める日が必ず来る」。広河氏がフォト・ジャーナリストとして胸に刻む信念である。そして、彼はこの言葉を実践すべく「声なき声」の持ち主とひとりひとり向き合っている。今回の講演会では、今日のジャーナリズムが直面する危機と私たちが直面しなければならない真実とは何かについて、イラク・アフガニスタン・パレスチナでの取材を通してお話をされた。今日、私たちは多様なメディアを通して沢山の情報を受け取ることができる。しかし、多くのメディアから提供される情報は商品価値を追求された表面的なものにすぎず、その背景はほとんど報道されない。例えば、ハマスがイスラエルにロケット弾を打ち込んだという出来事を伝える際、本来であれば「なぜそのようなことが起こったのか」その原因を伝えなければならない。それがジャーナリストとしての仕事だと広河氏は言う。しかし、日本のメディアの多くはその原因を確かめようとしない。インターネットの普及した今日では一般の市民ですら家庭のパソコンを通して調べられるようなことを多くの専門家を抱えるメディア企業は行わない。結局、ジャーナリズムもまた会社という組織の中の市場経済に組み込まれ、背景を十分にとりあげない表面的な報道で「ハマスも悪いけど、イスラエルもやりすぎなのでは」という曖昧なスタンスをとってしまう。そして、こうした情報を受け取る視聴者は無意識のうちにこのような思考を形成されてゆく。また、言語的な問題もある。9・11の事件以降よく取り上げられる「自爆テロ」という言葉は、実は日本のメディアだけが使う表現だという。英語では「自爆攻撃」となるが、日本で報道されるときは「自爆テロ」という訳、あるいは字幕解説がつく。つまり、「テロ」という言葉をつけることで「自爆テロ」をする人＝テロリストという構図が自動的にインプットされ、原因を考えなくさせられる。しかし、実際に「自爆攻撃」にいたる背景には個人的な体験がある。例えば、抵抗運動（投石）をしていたある青年は、イスラエル兵に家宅

搜索を受けた。彼は逮捕される際、家族の女性の前で素っ裸にされて連行された。パレスチナの人にとっては死ぬことと同じような苦しみと辱めを受けて逮捕されたことになる。当人だけではない。祖母にとっては自慢の孫であり、母にとっては誇らしい息子であり、幼い妹にとっては尊敬する兄が自分たちの目の前で辱められる姿を見る彼女たちにとってもその苦しみはどれほどのものであろう。彼は後に釈放されたが、刑務所での日々について何も語らず、部屋に閉じこもったまま一言も口をきかず、ある日突然体に爆弾を巻きつけて街の中で自爆攻撃をして死んだ。彼の家はブルドーザーで破壊され、弟はショックで口が聞けなくなったという。実際の報道ではこのような個人の体験は一切黙殺され、ただこの男性が「自爆テロ」をしたということだけが報道される。広河氏は写真を通して、この世間的な報道の背景に隠れている真実を私たちに提示する。それは時として、目を背けたくくなるような「残酷」かつ「過激」な情景でもある。しかし、彼はこれが真実であり、ここから目をそむけてはならないと言う。

私たちの身の回りにある情報はもちろん重要なものだ。しかし、その情報の裏に埋没している個人の経験をまず考えなければならないのではないかと。情報を鵜呑みにするということはそのまま受け入れるということよりも、思考を完結させてしまうことではないかと思う。ある出来事に対して「なぜ」、「どうして」という問いかけを終わらせることではないだろうか。確かに、このような問いかけをもって物事に向き合っていくことは大変な労力を必要とする。自分でいろいろな資料を読み込むことも必要であるし、そうしたさまざまな視点からの情報を集める必要もある。思考を維持させることは非常にたくさんのエネルギーを使わなければならず、確かに疲れる。しかし、広河氏が一枚の写真に真実を託そうと絶え間なく歩まれるように、私たちにできることはこの思考を止めないことではないだろうか。それは自分自身のためであり、世界の「変化」につながる意志となるのではないかと。

記事：徳平 陽子（中学校社会科教師）



2009年2月21・22日

「チャリティーショップ」



たくさんの方々に来ていただき、約14万円の収益がありました。早速、エルサルバドルの「みつばち保育所」に送らせていただきました。物品提供をしてくださった方々、当日お買い上げくださった方々、またスタッフとして一緒に働いてくれた友人に感謝します。次回のチャリティーショップは11月中旬に行います。販売する物品のご提供をお願いします。



会員募集

オリーブジャパンの活動に賛同していただける会員の方を随時募集しています。

- ・ 賛助会員（一ヶ月一口 10,000 円）
- ・ 正会員（一ヶ月一口 5,000 円）
- ・ 協力会員（一ヶ月一口 2,000 円）
- ・ 参加会員（一ヶ月一口 1,000 円）
- ・ 同調会員（一ヶ月一口 500 円）

「郵便振込用紙」に必要事項と会員の種類、納入方法（月払い／年一括）をご記入の上、会費を納入ください。

振替口座番号

00890-1-24582

会員の皆様には、会報「オリーブ・プレス」と講演会、バザー等のご案内を優先的にさせていただきます。

It's news!

現在エルサルバドルに日本人男子学生2名が約3週間「みつばち保育所」で現地スタッフとともに働いています。彼らのレポートは追ってお伝えします。

＊お問い合わせは、下記連絡先まで。
年4回発行 「オリーブ・プレス」 Vol.11
2009年4月4日（土）発行
発行 オリーブジャパン国際開発協力協会
olivejapan80@hotmail.com

海外での働き

オリーブジャパンは現地カウンターパートと協力して働いています。

◆エルサルバドル（サンサルバドル）

エルサルバドル事務所

FUNDIPRO（見捨てられた児童のための援助協力）

現地スタッフ：アンドレア・ロマーニ

ステファノ・バルビエリ

《事業内容》

- ・ 文化教育センター設立（1994年2月）
- ・ 貧困に苦しむ女性のための自立支援事業洋裁講座
- ・ 貧困に苦しむ若者のための「安定した家」設立
- ・ 児童センター「みつばち保育所」運営
- ・ 運営協力、ボランティア派遣による支援活動
- ・ エルサルバドル地震被災民の子どものための教育施設運営

◆メキシコ合衆国（メキシコシティ）

メキシコ事務所

I.C.T.E（Instituto Cientifico Tecnico Educativo）

メキシコ技術短期大学

現地スタッフ：パオラ・レオーニ

《事業内容》

- ・ I.C.T.E 技術専科短期大学設立（1993年9月）
- ・ 教育者育成のための講座開講
- ・ 就学困難な学生のための奨学金制度実施
- ・ 外国人のための留学制度（スペイン語コース・インテリアデザインコース）実施

◆ホンデュラス

現地スタッフ：マイダ・オチョワ

《事業内容》

- ・ 未婚の母のためのセンター設立

◆ベネズエラ

現地スタッフ：ヘンリ・デ・ナランホ

《事業内容》

- ・ エルコロソ農業学校への施設整備支援